

「ルネサンス学」開講

| | |
|----------|---|
| 著者 | 澤井 繁男 |
| 雑誌名 | 関西大学文学論集 |
| 巻 | 56 |
| 号 | 2 |
| ページ | A35-A57 |
| 発行年 | 2006-10-25 |
| その他のタイトル | Apertura della cattedra di Studi Rinascimentali |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/12526 |

「ルネサンス学」開講

澤 井 繁 男

本学大学院に本年度より「ルネサンス学」が講義科目として設けられた。おそらく全国的にみてもこうした名称の講座を持つ大学及び大学院は稀少ではないかと思う。いや、本学大学院が最初であるかもしれない。着任（二〇〇四年四月）して日も浅いので、本学で「ルネサンス」がどのように教授されてきたか不明であるが、美術史の分野ならまだしも、歴史学では中世の域に位置づけられているはずで、〈ルネサンス文化運動〉という呼称はあっても、いわゆる時代区分（の是非は措いて）の中で指定席を得ているとは思えない。あいまいな約三百年間と言われても否定するのはむずかしい。そこに魅力があるわけだが、巨視的・微視的を問わず、この文化現象には西洋文明の古層にまで垂れる幾本もの根を見出しうる。

今回は、ルネサンスを展望するのに適切な概説書はないかと渉獵していたときに出会い、〈序文〉を読んで翻訳を試みた英文書の〈序文〉と〈I 序章〉を掲載してみる。この本は版權取得と翻訳出版のため、さる版元が動いてくれたが、著者との連絡が全くつかず、陽の目を見ることができなかつた。大学生の教科書用として執筆されていて、イタリア人の書いた類書に散見される煩雑さもなく、アメリカ人らしい要領のよいまとめ方で好感がもてた。

著者は PHILIP LEE RALPH () の人物については一九〇五年生まれで、他に共著『世界文明—その歴史と文化』(邦訳なし、一九七四年)があること、ミシガン州立大学で教鞭を執っていたことだけしかわからない。版權取得も不可能だったことからその時点までに死去していたのかもしれない) という研究者で原題は *THE RENAISSANCE IN PERSPECTIVE, st. MARTINS Press/New York, 1973* である。『ルネサンス展望』とでも訳せようか。

目配りの利いた八つの章から成り、各章の末尾には、「参考文献と継続的読書への示唆」が配されて、研究者への便宜が図られている。ルネサンスに少しなじんだ学生には最適なステップ・アップとなりうる書である。約三十年前の本だが、理念篇とも覚しい(序(の主要部分)やⅠ 序章)の提示している問題は、三十年後のいまでも考えるに値するものである。拙い訳だが、「ルネサンス学」開講を祝して、ここにお届けする。

序(抄訳)

十四、十五、そして十六世紀初頭のヨーロッパのルネサンスについて本研究は、ルネサンスを、西欧の歴史的文脈の展望の中に位置づけようとするものである。

ルネサンスは本質的にイタリアの都市国家の現象であったが、イタリア・ルネサンスは孤立して発展したわけではなかった。それは西欧の文化遺産に深く根ざしており、アルプス以北の諸国に深甚な影響を与え、とりわけ、西欧の全都市共同体を襲うある危機を招き寄せ衆目の知るところとなった。それゆえ必然的にイタリアに主たる注目を向けているが、一方で北方や西方ルネサンスの重要な局面や鍵となる人物も視野に収めてある。

本書はルネサンスという言葉をもっと広い意味で用い、ルネサンスを学ぼうとする人たちを対象に意図的に執筆されたものである。専門用語の使用や膨大な量の人名、出来事の羅列を避け、ルネサンスに関しての意識を覚醒し認識を

深め、理解度を増すよう努めている。事実背景を十分に記して初心者も議論についてこられるようにしてあるし、概略年表も参考文献として付してある。しかし本書は記憶の手立てのために編まれたものではなく、思索の拡張を誘発するのをねらいとしている。何人かの人物が議論から完全に省かれてしまったが、それは時代の本質と意義を完全に照らし出す人物の詳細な分析を可能にするためである。(要約の章である最終章を除いて) 各章に付した、簡潔なコメントを加えた文献一覧は、ルネサンスのあらゆる局面で現在役に立つ一連の学術文献案内として有益なものである。貴重かつ豊富な文献がルネサンスの歴史と文化のために書かれているけれども、後代にとって不可欠な特色や適合性を広く記述し解釈した簡明な著作はわずかである。そうした解説をめざして現行の研究は入念に社会的政治的趨勢を検証しており、また一方でルネサンスの創造的精神を刺激する、基礎的前提、理想と抱負、人間観、宇宙における人間の位置や運命といった理論的な力も強調している。ひとつの文明の最高度の達成である理念と理想こそ、その文明の強さと限界だからである。

独善的な判断を極力避けつつ、本書はひとつの視座を具現化している。それは通常の解釈から力点を移すこととなるのだが、根本的でも全く新奇でもない視点である。つまり、ルネサンスが「中世的」であるか「近代的」であるかについてのあまりにも長期にわたる論争に関しては、本書の立場はルネサンスを中世の所産としてみなしている。というのも当時の人間の信条や行動様式に中世的な名残りが留められているのみならず、中世的なものが最も水際立つて達成されて勝利を収めているからである。ルネサンスは、中世の人たちの想像力を刺激していたがいちども完全にその潜在的力を伸ばしきれなかった観念を、きわめて詳細かつ明確に表現するに至った。近代が中世と袂を分かつと同時に、ルネサンスとも縁を切るのである。得ることと失うことの両方の結果が生ずるわけである。

近代的局面もルネサンスに見出しうるが、発見するのに時間がかかって注目に値しない。近代という時代、また現

代の「ポスト・モダン」の時代を支配する特徴は、ルネサンス期には劣性であることをまぬがれなかった。それらは反主流として往々に認められぬまま疑いの目で見られた。しかし最終的には古の文明を粉碎するには充分の力は保持していた。ルネサンスの美術、文学、哲学思想の記念碑的所産は、長期間耐えてきた文化的、理論的、そして精神的伝統の最終的声明であると言えよう。こうした伝統を放棄したことは想像力の衰退でなく、目的の決定的変化、つまり現代へと連綿とつながる新たな首途かたでであった。ルネサンスの真の意義は西欧の歴史、いやおそらく世界史の中で大きな溝だということである。ルネサンスは進退谷まわまった状態を特徴としている。

ルネサンスは前科学時代の最も熟れた果実であった。現代は科学の強い影響力とそれに伴う産業革命と科学技術革命によって形成された。こうした影響力は広範囲に及ぶ物質的変革だけでなく価値観や人生の目標に同じく大きな変化をもたらした。興味の関心が想像しうるものから計測しうるものへ、自然と宇宙との調和から自然と宇宙の征服へ、生活の質から量、拡充、支配へと移った。ルネサンスは人間を理解せんとしたが、現代は人間を操ろうとする。知識がとてつもなく広がったがために、現代人にはルネサンス時代の人間が思いもかけなかった力が与えられた。ルネサンス期の人々は惑星が人間の生活に与える影響力を恐れたが、現代の私たちは惑星に殖民しようとして夢見ている。

現代文明の問題と不安材料は、その誇り高き成果と同じく、その病根を、何世紀にもかかって作り上げてきた所産の中にはびこらせている。私たちは同種の病因を、ルネサンスとして知られる、壮麗と悲劇の過渡的時代の中に、尚早の兆候として見出すことで、いつそう理解が深まるのである（後略）。

一九七二年十月

I 序章

十六世紀は、充全で筋目正しく拡張を遂げんと、コロンブスからコペルニクス、コペルニクスからガリレオまで、つまり地球の発見から天界の発見に至るまで走り抜いている。これこそ人間が人間を発見したのである。

——ジュール・ミシュレ「ルネサンス」(『ルネサンス』)

生活と思考に関して古典古代の方法とキリスト教の方法の差異はとても大きいので、調和は図りえなかつた。調和に至らせようと努めたのが原因で、信仰と道德の昔ながらの基調が蝕まれ、安定するものがみずからの場をもちえない不確実な状態が生じた。

——セシーリア・アディ「ロレンツィオ・デイ・メデイチとイタリア・ルネサンス」

一般的な想像の中ではルネサンスは魅惑的な時期、黄金の時代と言っても支障はない。ルネサンスは、芸術の傑作が各工房で生産されつづけ、芸術家の生活が安定し満ち足りたものになるほどまでに文化水準が高まった時代としてみなされているかもしれない。あるいは思考のあらゆる分野に革命を惹き起こし、かつルネサンス期が「暗黒時代」の悼尾とうびに密接して続いているがゆえになおさら際立った知的覚醒と同一視されるかもしれない。この場合「暗黒時代」とは、全中世とうっかり混淆される、西ローマ帝国「崩壊」につづく九世紀ないし十世紀にわたる定義不明確な時代のことである。さらにルネサンス期は近代を形成するためにあらゆるものが出発した始点と考えられるかもしれない。以上のように決めてかかるとルネサンスは、科学の誕生、専制権力からの個人の解放、効率的な政府の発生、それに

国家や社会の世俗化、つまりありとあらゆる現世的進展の始まりと同意語になる。

大衆的伝承に独自の地位を築き上げたルネサンスについて、熱狂的な評価を下すのは難しいことではない。この時代に共通してあてられる名前そのものが敬服の念に満ちた反応を惹き起こす。後世の人々によって命名された時代名の中で、ルネサンスほど幸運な時代は歴史上かつてなかった。「再生」、つまり長い冬眠の後の生の刷新であり精神の復活——これこそきわめて怠惰な想像力を鼓舞する象徴である。

ルネサンスの有する特権は、学会での幾多の熱烈な賞賛者による広範な影響力で高められてきた。スイスの歴史家ヤーコブ・ブルクハルトが著わした『イタリア・ルネサンスの文化』は一八六〇年をはじめ出版されたもので、近代のルネサンス崇拜熱の先鞭をつけた。ヨーロッパ史の一時期、特に十六世紀を称賛するためにルネサンスという用語を最初に用いたのは、実際のところブルクハルトでなく、フランスの歴史家ジュール・ミシュレであった。彼は『フランス史』（一八五五年）の第七巻に「ルネサンス」という章題を付した。「世界の発見」、「人間の発見」という有名な文句を創始したのもまたミシュレであった。ブルクハルトはこれに飛びついて、ウォーレス・ファーンソンがいみじくも述べているように、「忘れがたい銘句に敷衍ふえんして偉大な書物に仕立てた」のである。

ブルクハルトの命題

著名な「ブルクハルトの命題」はルネサンス期を賞賛する者と中傷する者の両方の論拠に好都合なきっかけとなっている。行き届いた調査で結論を強化し、生き生きとした人間描写と説明を裏打ちする生鮮な逸話で叙述を豊かにして、ブルクハルトは十四、十五世紀のイタリア・ルネサンスをヨーロッパ文明史の中での重大な転換点とみなした。彼は言った。中世の間、人間の意識は「共通のヴェールの下で眠りにについているか半覚醒の状態であった」が、イタリア

では「このヴェールが最初に空气中に融け入り、国家や現世のあらゆる事物を、客観的に扱い考察することが可能となった」と。ブルクハルトによれば、文化だけが「中世の現実離れした枷から」自由になったのみならず、時代も「個性の完全化」を立証したのである。イタリアの都市国家の専制政府ですら、魅力的個性を持った人間が充分個性を伸長させる妨げにはならなかったし、専制政治にも拘らずイタリア社会の傾向は柔軟性と平等性の方向におおむね傾いていたと彼は主張した。そういった傾向は、ローマ帝国の記憶を呼びさますことで大いに高められた。ローマ帝国と言え、イタリア人の精神にとって永遠の理想としてあった。以後ずっとイタリア人のすべての抱負や成し遂げたものが、ヨーロッパの未知の場に存在した倫理的公準の先例となった」。

このような一節を記したブルクハルトは、「近代ヨーロッパの息子たちの中での長子」としてのイタリア・ルネサンスに、また同様に後世の子孫たちにも、寛大な賛辞を送った。彼は自身の主たる命題を次の主張にまとめた。つまり、「イタリア・ルネサンスは古代の復活のみならず、西洋世界を征服しえたイタリア人の天才との結合でもあった」と。

ルネサンスの魅力的な人物、見解、能力に魅了されながらも、ブルクハルトは決してその欠点に気づかないわけではなかった。彼の十九世紀的倫理観は再三再四、君主や傭兵隊長コンドッティエリ、暗殺、極悪非道な陰謀、そして赤裸々に書き記された感情露わな犯罪にしりごみした。彼は当時の思想に顕われた宗教的懐疑論、不可知論、無神論の強力な潮流を記述した、いや、おそらく誇張した。彼はイタリア・ルネサンスを本質的に精神上異教であると解釈し、こうした特徴を、自己主張の強さや異教的古代の崇拜と、倫理的にも知的要求のいずれでも満足度を達成できなかった当時の教会の失敗とが自然に結び合わさった結果であると説明した。時代の悪徳を無視も擁護もせずに誉め称え、その種の悪徳を、自由な社会の出現には付きものであり、思春期にわだかまる苦渋に匹敵しうるとした。さらにルネサンス期の人

間と同様に十九世紀の人間も、事実に基づく知識の進歩や客観的探究の修練を積んだにしても「神へ回帰」するに至る道は、古代の純真だが無知な信仰を打ち砕いた後でもいぜんとして不確かであったと彼は述べた。これにも一理はある。

ブルクハルトの後、多くの著述家たちがルネサンスの栄光を称え理想化する経緯に貢献した。著しく影響力があったのはジョン・アディングトン・シモンズで、彼はブルクハルトの命題を七巻本の研究書『イタリアのルネサンス』に具体化し、そのうえ文学的芸術的に高度な批評を展開しつつ、ブルクハルトよりさらに進んでルネサンスが中世との完全なる断絶を具現していると主張し、近代世界の黎明と持ち上げた。中世にシモンズは言うにたるべき内実を見出しえなかつた。

諸芸術や発明、知識や書物は、ルネサンス期に突如として肝要なものになったが、我々が中世と呼ぶ死せる海の岸辺で長い間なおざりにされてきたのである。……中世の精神状態は、教義、権威、スコラ哲学といった教会という偶像の前に無知のまま屈服していた精神であつた。……その理由は、一言で言えば覚醒していなかつたということ。つまり人間の知性が己の富と能力に気づいていなかつたということなのである。

この陰鬱な景色を背にして眺めると、シモンズの観点ではルネサンスは文字どおり「新生」であつた。以下のように叙される。

「ルネサンスは」あれやこれやの特徴で説明されるべきではなくて、ついに時機到来し、その前進の中になおも

身を置く人間的努力として受け容れるべき自然運動だと思える。ルネサンスの歴史は……ヨーロッパ民族に顕著な人間精神が自意識ある自由を獲得する歴史である。……それで産み出された力は近代世界の精神の中で、生き生きかつゆつたりとそのまま留まっているのである。

死から生へのこうした顕著な変容には、ひとつの説明が必要だった。シモンズが問うには、「紀元後約十四世紀のある時期に、大ざっぱに言つて、西欧民族の知性がいわば微睡まどろみから覚めていまいちど活発に始動したのはどうしてか」。彼は難しくて回答できないので疑問から顔をそむけて、「人間という神秘が分析をはばんでいる」とした。しかし次の段落で彼は、少なくともルネサンスという奇跡の地理的位置にきわめて簡単な解説と思しきものを提示した。「イタリアがルネサンス期に主導権を握つたのは、他の諸国がいぜんとしてなかば野蛮状態のときに、イタリアは言語を、好適な風土を、政治的自由と商業的繁栄を得ていたからである」と。

シモンズはルネサンスが中世に負うてるものがあるとはいっさい認めがらなかつた。ルネサンスと中世は昼と夜の違いに等しかつた。最も際立つて不快な彼の比較を引いてみる。

中世の間、人は頭巾に顔をくるんで生きていた。人間はこの世の美しさが見えなかつたし、見ても十字架を切るだけで、脇によけてロザリオをつまぐつて祈るのだった。レマン湖畔を旅していた聖ベルナルドゥスは湖の淡い青色、葡萄の豊饒、陽光と冠雪を纏つた山々の光輝に気づかずに、またがったラバの首筋に思索に疲れた額を垂れていた。この僧にも似て人間はこの世という街道を罪や死や災いへの恐怖に心を奪われた巡礼者として通り過ぎていき、風景が見るに値し、人生が祝福すべきものであることをわからなかつた。美は誘惑の罫であり、快樂は罪であ

り、現世はつかの間の見世物であり、人間は墮落して迷える羊となり、死こそ確実で、天罰は避けがたく地獄は尽きることを知らず、天国に辿り着きたい。無知が信仰や服従の証として神に受け容れられ、禁欲と苦行が唯一人を救う規程なのである。以上が禁欲的苦行を旨とする中世の教会の固定観念であった。ルネサンスはこれを打ち砕いて破壊した。人間の精神と下界との間に引かれていた厚い幕を引き裂き、現実の光を人間性の暗所に照射した。教会の謎めいた教えに代わって古代の人文科学の文化が用いられた。生新たな理念が確立され、それによって人間はみずから地上の君主となり、そこで生きることが運命づけられて特権ともなった。ルネサンスは牢獄からの理性の解放であり、外部の世界と内部の世界の二重の発見なのである。

中世史家の反発

二十世紀になって、ルネサンスが独自に光り輝く文明時代であり近代への出発点であるという命題に反発が生まれた。反動は、ブルクハルトやシモンズに不毛とも思われていた時代の文化に共感的理解を示していた中世の研究者たちによって特に推進された。中世学徒たちは、ルネサンスが直前の過去と実際はつきりと断絶していないと述べた。ルネサンスをもつばら中世の最終段階と同一視したのである。また、仮にルネサンスの主要な特徴が近代の礎となっているならば、それらの起源は十二、十三世紀に遡って発見されうると断言した。一部の中世史家は盛期中世を彩る思想や表現は、後のもつと華やいだ時代のイタリアの諸都市で花開いたものよりも事実上優れているとまで言いきつた。

この修正運動の目印となる著作は、チャールズ・ホーム・ハスキンスの『十二世紀ルネサンス』であった。イタリア・ルネサンスの価値を下げるのではなく、また人文主義者の生き方が古典ラテンの著作家への関心の復興に主とし

て刺激されたという伝統的な仮定を受容しつつも、一方でハスキンスは十二世紀のヨーロッパにラテン古典に関しての広範な知識と理解があつた事実を見出した。この理解は文法や修辭学の規則の単なる練習をはるかにしのいでおり、ハスキンスが強調するには、古典が文学として享受評価され、生きる姿勢に有意義な影響を与えたという。彼はソールズベリーのジョン（一一八〇年死去）の例を引用した。ジョンはキケロ的伝統を、聖書やラテン教父についての豊かな知識と融合させ、「均斉のとれたキリスト教人文主義」を生み出した。ハスキンスは全く禁欲的でないオウイデイウスの大衆性に注目し、十二世紀を「偉大な時代、おそらく宗教詩の中での絶頂期」であると述べた。彼は十二世紀の知的刺激に満ちた出来事が解釈されぬままであり、「中世ルネサンスと十五世紀には全く何ら断絶はない」と結論づけた。いずれにせよ連続の問題はさておいて、「聖ベルナルドゥスと彼のラバの世紀はかえって、多くの点で新鮮で活力にあふれた生の時代であつた」。

中世を再建するという価値ある貢献をした学者たちは中世に成し遂げられたものを誇張し、ルネサンス期の成果を過小評価するきらいがあつた。なかには、ペトラルカ以降に活躍した知識人の多くから反発をかつたスコラ哲学に、中世という時代の印象的な統合のみならず事実と叡智の比類なき源泉を見出した者もいた。フランスの偉大な知性的歴史家エティエンヌ・ジルソンは『中世の哲学』（一九二二年）で次のように書いた。

それで、眠りと暗さと誤謬の幾世紀かにつづくルネサンス思想の歴史を、伝説の領域に託すことが必要である。近代哲学は中世に対抗して理性の権利を確立するために奮闘するには及ばなかつた。理性のために権利を樹立したのは、かえって中世だったのである。

尊敬に値する少数の秀逸な中世学者は、ルネサンスの獨創性など人間の試みた意義ある領域に貢献していないと率直に述べてきた。科学が「信仰」、迷信、世俗輕視の「中世」に痛ましくも無視された知識領域であり、西欧人の知的進歩を示す印象深い科学上の発展は当然ルネサンスに負っているともみなされていた。しかしかなり多くの科学史家が、ルネサンスは近代科学の誕生に何ら實質的な役割を果たしていないと述べている。リーン・ソーンダイクは十五世紀が十四世紀に科学的に劣ると言い、さらに十六世紀を「科学上の専門家の時代でなくて多少とも素人好みの文学的関心の時代」とまで色づけている。こうした欠陥は、彼に言わせると「雄弁術や人文主義や古典を強調した」ためだからだった。彼は人文主義が「科学よりも表現^{スタイル}形体を、實質よりも見せかけ」を強調したと述べた。もっと最近の批評家「C・A・トルウズデル」によれば、「初期の、つまり、一四五〇年から一五〇〇年までの『穢れなき』ルネサンスは西欧の数学や物理学の最も不毛な半世紀間の競争の最前列に位置する」という。おそらく最も激烈な評は、一九二九年にジョージ・サートンによって公表された。つまり、「科学的観点からすると、ルネサンスはルネサンスでなくて、「二つの峰に挟まれた、一種の不面目な結果」である。彼は「人文主義者の反科学的傾向」を数え上げ、ルネサンス人を、「どんな科学的啓発にも本能的に抵抗する」として批難した。

ルネサンス観の変遷

ルネサンスに関する評価と姿勢は何世紀にもわたって大きく揺れ動いてきた。ルネサンスという言葉集りたいが至極ゆつくり時間をかけて一般化した。十九世紀以前にはルネサンスはヨーロッパ史の一時期に対する因習的な名称として採用されていた。それでもある種の文化的再生が中世末に生じたという考えは、イタリアの人文主義者自身に遡ることが可能である。『ルネサンス芸術家列伝』（一五五〇年）できわめて著名なフィレンツェの画家・建築家でもある

ジヨルジョ・ヴァザーリは、彼が書き著した時代に「再生」la rinascita の名称を採用した草創期の著述家であることは明らかである。しかし彼は美術史上の時期をそう呼び、その榮譽を称えたのである。

ペトラルカは、古典ラテンの作家たちの熱烈な擁護を通して「學術の復興」を主導してきたことでおおよそ功績があるが、彼なら自分が「人文主義の父」として歴史上伝えられる運命にあると知れば歎んだかもしれない。しかし彼はおそらく、子孫たちが彼の時代に貼ったレッテルを悲喜こもごもの複雑な気持で眺めたことであろう。ペトラルカはヨーロッパ史をとっても単純かつ徹底的に、「古代と近代」に区分して考えた。しかし彼は「近代」をローマ皇帝たちによるキリスト教の容認まで遡り、彼自身の時代までの一連の時代全体を「暗黒時代」と規定した。彼は同時代の人々と共有する生き方に熱意を傾けていたのではなく、古代ローマという繁栄の時代に生を得た自分の姿を夢見ていた。自分の生きているいまの時代とペトラルカの抱く理想は反目し合い、不毛な学問的伝統や自分と同意見の学者が希少であることに苛立ったのである。またキケロ、ウエルギリウス、そしてセネカの世界に彼自分が深く魅了されていたことも要因のひとつだった。彼はキケロやウエルギリウスやセネカに向けて、自分が修得した古典ラテンの文体で長文の修辭的書簡を熱心に書いた。

ペトラルカ以後一世紀半の間、ラテン同様ギリシアの学問の開花は、絵画や彫刻や建築の分野での輝かしい到達を伴いつつ、正当的な意味で達成をとげた。ルネサンス期の人たちは美術や文学の再生を誇りはしたが、新たな文明の創始者として自分たちを考えなかった。もし創建者だとすれば、当代の特徴を倫理観や人生観、風俗・習慣、同時代を往き交った矛盾だらけの思潮ゆえに、定義するのに苦労したであろう。実際、一般的に主張されているように、ルネサンスの初期には希望と自信に満ちた精神が顕現したが、盛期ルネサンスには、疑念に汚れた未解決の論争がはびこっていた。一方、人文主義の父として榮譽を称えられたペトラルカは、名声の希求と虚栄心に対する罪意識に引き

裂かれんばかりで世を棄てたいと希った。他方盛期ルネサンスの最中とそれ以降を生きたベンヴェヌート・チエツリ
ーニは、自己の動物的にして人間的な本性の全要求を喜々として受け容れた。

ポスト・ルネサンス、つまり「近」代の四世紀の間、ルネサンスの概念は支配的な関心や信条の連続的变化にした
がって移り変わってきた。十六世紀の宗教改革はルネサンスよりもっと完璧に中世の諸制度との決裂を表現するも
の、人文主義の精神や芸術上の人文主義的表現の両方に敵対的であり、人間の自己満足や人間固有の価値という概
念を即座に拒絶した。宗教改革のずっと後になってルネサンスを、ルターとカルヴァンが着手した革命のための素地
の準備期間、加えて同盟血縁的な運動として解釈するのが一般的になった。しかしこうした解釈のせいでルネサンス
と宗教改革のここぞとわかる特徴はともに曖昧になってしまったのである。

辛辣な神学論争や宗教戦争を伴った宗教改革の時代とは対照的に、啓蒙主義として知られている十七、十八世紀の
時代には、人間が完全であるという定則を肯定するほどに、人間の潜在能力への自信は回復した。啓蒙主義の代表的
人物たちがルネサンスに関して共感を抱いて眺め、「野蛮な」中世という粗野、無知、妄信の時代からの脱却をかけ
て闘ったがゆえに、彼らに進歩の時代の出発点の榮譽を与えても驚くに値しない。しかし十八世紀の自由主義者は未
来に較べてあまり過去に関心がなく、当代こそが理想社会の実現を可能にする叡智をまず充分保有していると信じて
いた。たとえばヴォルテールは、ルネサンス人を中世の宗教的遺産を拒絶した廉で（彼は彼らがそうしたと誤った先
入観を抱いていた）批難する一方で、理性と科学的真理に基づいた宗教を立てて、厄介な教会制度を解体しなかつた
ことで難詰した。ヴォルテールにしてみれば科学的宗教こそ、倫理と人間の幸福にとって必然的な基調であるのは明
白であったのであろう。十九世紀に至って、啓蒙主義哲学の「自然宗教」である理神論が中世から受け継いだルネサ
ンスの宗教的伝統よりも生彩を欠き訴えるものが少ないと思われるとは、ヴォルテールとても予測できなかったであ

ろう。

十九世紀の初めまでに、合理主義や新古典主義が浪漫主義に取って替られた。浪漫主義は過去を共感的姿勢と尊厳に近い崇敬の念で読み込み、包括的に解放して時代に息吹をもたらした。浪漫主義の時代の著述家たちはルネサンスの中にある種の魅力、しばしば病的な魅惑をも見出した。浪漫主義者たちは偉大な個性、邪悪、血、そして暴力に心を奪われた。『ルクレツィア・ボルジア』という戯曲の中で、悪名高きこの女性の周りの陰謀、毒、近親相姦といった伝説を美化して、彼女をその時代を象徴する強欲と残酷の権化に仕立て上げた。ユーゴーよりやや早い時期にヨハン・ゲーテは、浪漫主義と古典主義の双方を知的に把握していたが、十六世紀の最も代表的な人物として自己本位で神経質な芸術家ベンヴェヌート・チェツリーニを、王者ラファエロより重視した。ヴィクトリア朝中期の英国の有力批評家ジョン・ラスキンは、盛期ルネサンスの芸術を異教的、反宗教的、反道徳的であると批難して、ルネサンスの精神を往々にして邪悪だと決めつけた。現実的であれ想像上であれ、ラスキンのようなモラリストを受け容れない質のものが、十九世紀末の浪漫的な大個人主義フィリドリック・ニーチェを惹きつける質のものにはかならなかった。これは驚くべきことではない。ニーチェはルネサンスを称賛したが、それはルネサンスが彼にとって、キリスト教的謙讓への反抗、生きる上で自然で本能的で異教的な意思の肯定、つまり束縛のない超人の時代として存在したからである。

しかしながら、浪漫主義が感情に重きを置くにも拘らず、浪漫主義の時代はルネサンスからその主たる靈感を引き出さなかったし、歴史的枠組上、崇高な位置を割り当てなかった。これはひとつには浪漫主義者の多くが宗教的価値観を再肯定しようとしたりルネサンスの所謂異教主義を批難したりしたからであり、またひとつには彼らが古典的遺産の残滓よりもヨーロッパの諸民族の起源や際立った特徴の方に関心があったからである。さらにもっと大切なこと

は、浪漫主義者が中世を発見して一種のおとぎの国として先取りして、その景色や登場人物に眩いばかりの色彩を与えたりおとぎ話にふさわしい彼らの考えを引き出したりして悦に入っていた、という事実からでもあった。

全くおかしなことなのだが、ルネサンスの歴史的知識の豊かな鉅脈を充分に利用したのは、堅固で散文的で物質的に成し遂げられたものでぎっしり詰った、きわめて非浪漫的な時代である十九世紀末の現象であった。おそらく急速な工業拡大、無名だった会社の大成、そしてますます機械化の進む環境からの圧力のおかげで、この時代にルネサンスが流行するに及んだのである。ブルクハルトは名著『イタリア・ルネサンスの文化』で、ルネサンスの中軸となる貢献の一つとして個人主義の概念を強調し、一つの章に「個人主義の発展」という章題をつけた。『古典古代の復興』（一八五九年）や後の著作でゲオルグ・フォークトは、イタリア人文主義者の知的能力の限界を認識し、古典へのうぶな心酔を批判しつつも、個としての人格に存分な役割を与えたことで評価した。フォークトはこの大胆で新しい出發をペトラルカの例を挙げて論じた。ペトラルカこそ、「はじめて個人とその権利に最高級の意義を求めて、力強くかつ自由に屹立させた」と。自由思想家や浪漫的な個人主義者、さらに十九世紀の愛国的国家主義ですら、ルネサンスを西洋発展の出発点、また人間が複雑で一層平準化した工業社会の重荷からなおも自由であった時代として愛着を抱くことができた。そして十九世紀よりいっそう機械に悩まされるが、人間の自由の可能性について幾分幻滅した時代、二十世紀の学術を解剖するナイフは、ルネサンスの魔術的包装紙を切り落としはじめ、ルネサンスという時代からその独自性を奪い取って、中世と近代の間の単なる架け橋へとルネサンスを位置づけた。これはひとつの脅威であった。

最高級の壊滅的な攻撃がルネサンスの概念を破壊しうるかどうかは疑わしい。最後の儀式が行なわれ遺体がどこそここの（異教かキリスト教か議論が沸騰するにせよ）墓所に引き渡された後も、ルネサンスは人々の意識の中にまざま

ざと息づいているのがわかるであろう。ルネサンスの性質や意義を巡っての討論は、ルネサンス解釈に捧げられた広範な一群の文献を生み出してきており、おそらく今後もそうであろう。ブルクハルトの命題は資料的欠陥はあるにせよ、条件づきでも支持を集める魅力を失っていない。レオナルド・オシユキはその輝かしい肌理きまこまやかな研究である『イタリアの天才』（一九四九年）で、ブルクハルトよろしく、イタリア人の精神と魂の独特な特質に賛辞を呈し、ルネサンス文明をイタリアの天才が連続して出現した事例のひとつとして解明した。現代のルネサンス研究家の指揮官的人物であるハンス・バロンはブルクハルトの主要な論点がいぜん有効だと見ている。「近年の学問は」と一九四三年に彼は書いている——「十五世紀ルネサンスの根本のところ、人生観や世界観の基本的変化」つまり「近代ヨーロッパの息子たちの中での長子」の誕生「があつたというブルクハルトの命題を發展させた」。

ブルクハルトについての手厳しい批判は誤った観点を矯す上で極端に走つたために、同じくらい極度に歪んだ観点にすりかわつた。たぶんジュセツペ・トツファニントツファニンは、説得力のある学識は別としてこの部類に位置されるであろう。『人文主義とは何だったか』（原典イタリア語版、一九一九年）で彼は、ルネサンス文化に慣例上あてはまるあらゆる定言を覆すことで挑戦状を突きつけた。人文主義を称える一方で彼は、人文主義を異教的古典作品と触れて刺激を受けた個人主義の前兆としてでなく、信仰を擁護し物質主義、抑制のない個人主義、特化尊重主義、そして近代主義といった異教勢力に対抗する普遍的で精神的価値観を保持しようとする正統カトリックの盛り返しだと解釈した。彼の立場に立つと、ラテン語という言葉、普遍主義、そしてローマ教会は、個別化した俗語文学、中世末期のムーネの民主政治、そして科学的物質主義に対抗して、真実と文明のために同盟を結んだことになる。トツファニンが伝統的役割を根底から割り振りし直したことは、真実の幾多もの粒を露呈させはしたが、判断を明晰にするよりも混乱させている。しかし妥協点のない見解のぶつかり合いは不一致を不朽にするかもしれないが、少なくとも論争の時代が決定

的な時代であり、ヨーロッパ社会の運命にとつていつまでも重要だったという確信は強化されるのである。

解釈と判断

ルネサンスを理解し評価する際の難題は、それが複雑で多面的であるので、それにも拘らず唯一の概念的枠組にあてはめられない解釈を求めて叫んでいる一点にある。「ルネサンス」という言葉はそれじたいひとつの宣言であり挑戦である。ルネサンスというメタファーが適用される文化は、過去と未来との両方の多くの微妙な絆で結ばれつつ、全体としてルネサンスを西欧文明の視座の中で見つめようとすることだけで価値が認められうる。これは主観的な判断を下すことを意味し、それは全知的理解を要求することはなくとも、最も際立った特徴を照らし出して観察者自身の経験へと近づけさせるのである。

ルネサンスを中世と近代の過渡期と分類するのは筋目が通っているが、そうした分類は便利であるけれどもそれほど啓発的ではない。一方でそれは時代がそれ自身の特徴を欠いたことを示唆するが、これは当たっていない。他方それは「中世」と「近代」が意味するものの解明を求めるが、両者ともに曖昧で融通のきく言葉であつて、種々な定義が可能である。確かにルネサンスは過渡期だったが、いったい過渡期でない時代があつたか、どの時代も過渡期なのである。しかし大切な問題は、変化の流れが同じ方向に動いていたか反対の目標に向かつて動いていたかであり、また変化が時代の特徴を決定するうえで単に偶発的であつたか必然的な要素であつたかであり、さらに変化が意識して認知されたか意図なしに生じたか、あるいは関係する人たちの意向に反対して起こつたかである。

ルネサンスは、社会的にせよ知的にせよ、動乱と変動の時代であり、ある意味で、変化しながら現代へとつづいた方向性を貫いて変化しつつあつた。この変化の枠組は主に外からの物質的なものであつたが、ルネサンスのずっと前

に始まつていて、ルネサンスを他と分かつ特徴を構成しはしなかった。具体的に言うと、都市社会の漸進的優位、資本家による事業、旅や地理上の発見への広範な関心、自然界とそこに住む人民への高まる知識である。これらよりはるかに重要なのは、個人的社会的目標や思考と想像力の変化であった。つまり実体はないにせよ、文芸や美術で表現を与えられた要素である。美術と文芸にあつて支配的な主題は近代的気質とあまり性分の合つたものでなかつた。ルネサンスの後の世紀を特徴づける特質や関心や傾向となつたものとかなり対立していた。さらに實際面のみならず想像力の分野でも主に棄てられてきたものを進んで受け容れ、価値を熟成していった。

ルネサンスは、技術刷新とか（多くのルネサンス期の思想家に長い間無視されたり敵視すらされたりした分野である）科学という学問の開拓とかいった、近代の夜明けに関わる局面の文明を扱う上で首尾よくいかなかつた。なによりもルネサンスは非特権的な労働者や失業中の貧民の必要に応えそこねたし、その必要性を認識さえできなかった。困窮者の数は富の局所集中化とともに増加した。ルネサンスは、信仰と知性の結合、人間的威信についての熱烈な見識という希望あふれる約束の時代である中世、また精神という最も高貴な観念を明確にするために美術と文芸を用いる伝統のある中世、その衰え行く中世からの遺産を陶冶する上でとてもうまくいったルネサンス期の思想家がみずからの動機とした理想を、自分たちの社会のなかの不平等さと無精な残虐性を和らげるための効果的道具に変換することができなかつた。これを見れば、ルネサンス文明のもろさと究極的な失敗がわらうというものである。ルネサンスが閉じる前に、感受性の強い知識人は自分たちの抱いた価値観が侵食の被害を受けていると、ぼんやりであつても認識した。ルネサンスの知識人は、人間という素材が、同時代の諸制度で形成されながらも、人間の可能性や理想像、それに理想が流布された社会と明確に一致しない現実を前にして自分たちの理想が夢にすぎないと気づいた。

ヨーロッパ史の伝統的な三分轄においてルネサンスは普通、一定の時代として扱われている。もつとも三世紀かそ

れ以上を支配する時代的区分という順応性のある年代ではあるが。しかしながらルネサンスという術語は、当初はイタリアで発現したがアルプス以北の諸国に影響を及ぼした、時期にしておおよそ一三〇〇年から一五五〇年までに限られた文化的要素の群れにあてはまる。そのような狭義の意味で用いられるときにだけははじめて意味をなす。フェデリコ・シャボールは、ルネサンスを「諸理念の流通、また最初の主要な『知的』現実である芸術的、文藝的、文化的『時代』」と呼ぶ折に、最も有効な手掛りを見事に定義した。中世とルネサンスの文明の対照点を説明して彼は、『マキャヴェツリとルネサンス』の中で以下のように述べた。

ルネサンスはその表現を個人生活にありがちな実用的な活動の中に見出してはいない。つまりフィレンツェ市民の陽気な生活、マントヴァの貴婦人の放縱、コンドットゥイユール傭兵隊長の慎みのない野望、あるいはナポリの官廷の一部の廷臣の多情なる密通の中ではなくて、むしろ人間の目論見や行動が理想的体系に合致し、単なる実用的本能的活動から精神的信条や人生設計といった地位にまで高められる方法の中に見出されるのである。

現在の研究の基礎となる判断と前提は簡潔に次のように要約されうる。つまり、ルネサンスは形式上でも精神上でも、近代よりもはるかに中世的である。しかしこの、現在広範囲に及ぶものの普遍的な合意には至っていない定言は、比較的つまらない主張である。これを肯定することは慣例よりもっと多くの事柄を中世に負うことになる。しかしそれは決してルネサンスを格下げするものではない。ルネサンス期の指導者たちが古典古代の諸形式を生き返らせ、賛美し、そして活用する一方で、古典的伝統を享受した指導者たちは主に、「人を鼓舞させる神話」(シャボールの言葉)として活用した。彼らは、囚人としてでなく昔ながらの一族の家屋を熱狂的に再装飾する筋目正しい後継者として、

中世文明の枠組に留まっていた。中世的社会や政治の秩序が崩解しはじめ、さらに古代ローマの黄金時代に魅了されて半中世的偏見を誘発させる一方で、創造的才能のある者たちは、中世の世紀を通じて活発であったかあるいは潜在的であったかした理想と抱負に生き生きした表現を与えようとした。長い哲学的宗教的伝統の所産であるこうした理想は、新たな取り扱ひを受けた。ある意味でそれらは「世俗化され」て引き出され、より直接的に個人の意識や経験の軌道の中に入っていた。ルネサンスの最も大胆な精神が企てたものは、古代人の叡智とキリスト教の伝統の中に内在する特徴を充分に実現させること、つまり、遠方の希望からのこの徴候を、生きた人間によって享受できうる現実存在へと移り変えることなのである。

一般的に「人文主義者」という術語で知られるルネサンス文化の指導的人物たちは、実際人間中心であった。しかし彼らは人間が自然の子でありまた神の創造物でもあること、さらにこれら双子の定めを通じて人間が威厳と善意ある位置に到達できうると確信していた。後期ルネサンスの代表的人物であるロッテルダムのエラスムスは、当時最も偉大で最も献身的なキリスト教徒であり学者であったが、「神は、この世の人間をあらゆる点で神御自身の似姿そのものであるかのように、人間が万物の富を現世での神として養うべきだと定めた」と主張さえした。

イタリア・ルネサンスは、純粹に半島の出来事として理解されえない。都市国家から時間と空間を引き離せはしないからである。それは「理念の流通」として説明されうるかもしれないが、初期と後期の段階の間の差異には考えるべきものがある。初期ルネサンスは自信に満ちた、しばしばほとぼし進らんばかりの精神を顕わした。十五世紀の後半、最後の二十五年、また十六世紀の初期を含む、後期ないし盛期ルネサンスは、壯麗で力のこもった芸術作品をもたらしたが、挫折、幻滅、そして絶望の感情で苦しめられた。ルネサンスは一五二〇年代の半ばで頂点に達した。美術や文芸や哲学の天才たちの忘れがたい所産がこの期を中心に表出されたり制作されたりしたのは特筆すべきことであり、偶

然の一致でないことは確かである。著名な例を挙げてみよう。ミケランジェロのシステイーナ礼拝堂の天井のフレスコ画（一五〇八年——一二年）、エラスムス『痴愚神札賛』（一五一一年）、マキャヴェッリ『君主論』（一五二三年）、モア『ユートピア』（一五二六年）、アリオスト『狂えるオルランド』（一五二六年）、カステイリオーネ『廷臣論』（一五一八年）などである。一五二七年マルティン・ルターは『九十五箇条の論題』をウイッティンベルグに貼り出した。かくてルネサンスの絶頂期は、教会を根底まで揺がすのみならず、ルネサンスの息の根を止めることにもなった運動である宗教改革の開始とほぼ一致する。ルネサンスが最も充実して噴出した世代の中では、盛期ルネサンスの肯定的な精神は対抗宗教改革の陰鬱で抑制的な雰囲気に屈して、イタリアにあつて大方収まっていた。ヨーロッパ精神はその想像力が睥睨していた崇高な頂から後退して、地上の平原にある必然的に稔り豊かな事業に関心を抱くまでに及んだのだが、以後それより低い視点で人間の尊厳を概観することはなかった。

ルネサンスの生活と文化には、初期の樂觀的時代の始まり、また最大の芸術作品の一部に悲劇的特質を与えた後期の最終的崩壊的な時期、といった二分法が広く往きわたっている。この二分法は検証される必要がある。というのもそれがルネサンスに災いをもたらしたばかりでなく、解明されてこなかったし、装いもさまざまに現代の文明を苦しめつづけているからでもある。

以上である。

「ブルクハルトの命題」ではブルクハルトが近代史観者と槍玉にあげられることが多いが、彼でなくシモンズが中世との断絶を強調していることがわかる。中世が暗、ルネサンスを明としたシモンズがルネサンス近代世界黎明説の主唱者なのである。ハスキンスを代表とする「中世史家の反発」も、続く「ルネサンス史観の変遷」も常識の枠内で

手際はよく記述されている。著者の顕著な「解釈と判断」は読み応えがある。

「ルネサンスの最も大胆な精神が企てたものは、古代人の叡智とキリスト教の伝統の中に内在する特徴を十分に実現させること、つまり、遠方の希望からのこの徴候を、生きた人間によって享受できうる現実存在へと移り変えることなのである」の部分など訳していて三十余年後のいまでも共感を抱けたうちのひとつである。実際、当時の書かれたものをよむと、右の意識が濃厚であることがわかるからである。

ルネサンス史観の歴史は、多くの研究者の利用する WALLACE K. FERGUSON, *THE RENAISSANCE IN HISTORICAL THOUGHT, 1948* という未だ邦訳の出ない名著があり、ラルフもこれに拠っている。

ルネサンスという概念が時代区分として（日本で）認可されているかどうかはわからないが、〈再生〉という内実とメタファアの持つ力は大きく、その時代を生きる人たちの生活と密接につながっていると考えられる。この言葉の表現する、また表現が必要とされる時代を不要と思うようになるとき、それは至福かもしれないが、そうした時代の訪れはまずありえない。シャポーやトツファニンといったイタリア人研究者の名前も挙がっていたが、トツファニンを知る人はいるだろうか。他に、ガレンは言うまでもなく、敬愛するデリオ・カンティモーリなど、日本に紹介されていないイタリアの第一級のルネサンス研究者は多い。カンティモーリの「時代区分説」の研究は、ホイジンガーのそれとともに傾聴に値する。「ルネサンス学」の開講とともに本学で地中海文化の研究の礎が出来上がれば希ってもないことである。

〈了〉